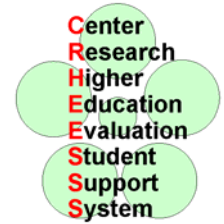


週刊センターニュース No.68



第68号(2005年7月11日)毎週月曜日発行
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL: http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm

共同学習会のご案内

第82回 日時: 7月14日(木) 16:20~17:50

会場: 総合教育棟南棟2階 大会議室

報告者: 青野 透(大学教育開発・支援センター 教育支援システム研究部門)

題目: 「レポートの書き方をどう教えるか」

趣旨: 前期の定期試験の時期が近づき、当センター企画の角間ランチョンセミナー「学び方教室」でも、「レポートの書き方」(同 中級編)を開催した(セミナーで使用したパワーポイント画面は当センターHPにリンク済み)。受講生はいずれも100名を超え、学生の関心の高さを示した。ミニ講義を担当したセンター教員として、その概略を紹介し、参加者からレポート・論文執筆の極意、添削の具体例および評価の方法などを、聞かせていただければと考えている。なお、来年度からの共通教育新カリキュラムに関する、教育企画会議共通教育部会による「大学・社会生活論」授業構想では、**学習方法指導(ノートの取り方、資料整理の仕方、レポートの書き方などの大学での学習の基本を講義する。担当は各学部等の然るべき教員)**との案が示されていることを付記しておく。

第83回 日時: 7月21日(木) 16:20~17:50

会場: 総合教育棟南棟2階 大会議室

報告者: 西山宣昭(大学教育開発・支援センター 大学教育研究開発部門)

題目: 「神戸大学の平成18年度教養カリキュラム刷新」

第7回大学評価セミナー参加報告

2005年6月25日(土)に関西大学千里山キャンパスで開催された、財団法人大学基準協会主催の第7回大学評価セミナーに参加した。セミナーは以下の3つの講演とディスカッションから構成されていた。

講演1 「本協会の大学評価の概要と高大連携に関する評価の現状について」

講師: 生和秀敏(広島大学総合科学部教授、大学基準協会相互評価委員会委員長)

講演2 「高等学校側の視点から見た大学評価」

講師: 萩原信一(都立新宿山吹高等学校前校長、全国高等学校進路指導協議会前会長)

講演3 「「大学評価」を高校(高校生)にどう伝えるか」

講師: 中津井 泉((株)リクルート「カレッジマネジメント」編集長、大学基準協会判定委員会委員)

生和氏は、大学基準協会の大学評価の目的、評価の基となる大学基準、評価体制、評価項目と評価基準、大学へのフィードバックなどについて説明された後、高大連携に関する評価項目として、「学生の受け入れ、教育内容・方法、学生生活、情報公開・説明責任」をあげられた。また、「相互公開授業、出前授業、大学公開、体験入学、入試方法と対応した教育プログラム編成、導入教育の共同開講・共

同開発、高大懇話会の定例化」などを今後の高大連携に向けた新たな評価の観点としてあげられ、大学は、高校および高校生に身構えた姿ではなく、普段の姿を見せることが重要であるとのコメントで締めくくられた。

萩原氏は、高校での進路指導に携わってきた経験から、「キャリア教育の推進、偏差値による入れる大学ではなく、入りたい大学への進路指導」が重要であると述べられた。進路指導の現場では、現実問題として、数百もの大学から送られてくる大学案内の中身まで見ての指導は不可能であり、高校生には、大学探しの方法を教えるにとどまっているとのことであった。進路指導担当として、大学は4年間通うと1,000万円かかる非常に高い買い物であると認識しているとも述べられた。全国高等学校進路指導協議会では、「(1) 学生が帰属意識を持って大学生活を送ることができるか。(2) 学生が入学後、社会の一員としてよりよく成長できるような環境が整えられているか。(3) 学費に見合った結果を得ることができるか。」の3つの考え方にに基づき、具体的には、経営、研究、教育環境、教育内容、入試、情報発信、就職・進学、外部評価の8つの視点で高校からの大学評価を考えているとのことであった。また、入試科目と入学後に学ばないように乖離（入試に数学が必須でないのに、入ってから数学の知識が大いに必要とされるなど）があるが、それは大きな問題であり、減らしてほしいとの要望を最後に述べられた。

中津井氏は、まず、情報感度と行動力の点からいまどきの高校生の行動パターンを分析し、いまどきの高校生の情報収集行動を以下のようにまとめられた。

- 主体性 = 自分の基準で取捨選択
- 映像・画像で理解
- リアリティ（大学案内などでの在学生の服装をチェックするなど）
- 情報源との信頼関係（人間関係での情報収集が中心、口コミで動かされる、初対面の人でも共感できる情報だと信頼するなど）
- いつでも検索（必要なときにしか検索しない）
- 最新情報（あまり更新されていなくていつ見ても同じ情報は、見なくてもいい）

いまどきの高校生にとって「わかる」とは抽象概念を理解することではなく、具体的事象をより多く知ることであるとも述べられた。これらの点を考慮して、今後、大学としては、カスタマーサービス型情報提供（大学入学後にやりたいことを入力すると、大学内の関連部局へたどりつくような、逆引きサイトの構築など）、カウンセリング型情報提供（「大学にとって」ではなく、「キミ（高校生）にとって」を考えるなど）を行って、いまどきの高校生の心に届く情報発信が必要であると述べられた。最後に、高校生にリアリティを感じさせるいい広告として、金沢工業大学の駅貼りポスター（大学周辺の町のサポーター、学内職員サポーターの顔写真入り）を紹介された。

3氏のそれぞれ異なる立場からの講演を聞き、大学評価が、単に大学が義務的に行うだけのものではなく、社会および高校（高校生）へ大学の活動をアピールし、生の大学の姿を伝えるという機能も持っているという点を新たに認識した。今後、各大学において、大学評価が、大学広報、学生募集戦略と連携し、より有効に活用されるような方向に進むことを期待したいと思った。

（文責 教育支援システム研究部門 堀井）